

私が彼女を初めて見たのは、温かな春の陽が差す日曜日でした。彼女はぼうつと空を見上げているだけで、微動だにしません。空に何かあるわけではなく、雲一つない変化の乏しい空はずっと眺めていられるものではありません。

公園のベンチに腰をかけている彼女の隣には車椅子が一つおかれていました。足が不自由なのでしょうか。私はそんなことさえ考えていたのです。何を思っただけ空を見ているのでしょうか。

そう、私は彼女に興味を持ってしまいました。

「あの……」

次に気づいたときには、私は彼女に声をかけていました。

「なんですか」

彼女は私を睨みつけるようにして声を返してきたのです。

邪魔をしてしまったのかと、私は不安になりました。別に彼女の邪魔をしたくて声をかけたわけではありません。しかし、私がそう思っていたとしても、彼女にとって邪魔だったのかもしれない。

「邪魔してしまいました」

「いえいえ」

首を横に振る。そうして、彼女は空へと再び視線を戻しました。

「わたしよく勘違いされるの。人と交わらない人生を送ってきたので人との付き合いかたがよくわからないの」

もともとから遠いところを見ていた目がさらに遠いところに視線をあてているように見えませんでした。

車椅子での生活。ふびん、かわいそう。そんな風に思われること、言われることが外の世界にはたくさんあったのでしょう。そんな想像は難くありません。だからおそらく外にでなかつた。

「空が好きなんですか」

「嫌いよ。大嫌い」

予想外の答えでした。空を見つめているのだから好きだとばかり思っていた私は肩すかしを食らった気分です。

なんとなくこの話題には突っ込んでいく気分ではありません。

「足が悪いのですか」

とつさに浮かんだ質問が、不躰でした。しまったと思ったときにはあとの祭り。取り返しがつきません。

「ええ。生まれつき」

あっさりと言われたことに私は内心驚きました。こういう質問は嫌悪されるものだと思います。聞いていたからです。

彼女の人生の中でなん度なん度も訊ねられたことなのでしょう。慣れてしまったのか。本当はどう感じているのか、私にはわかりません。

そのとき、ただ一点のみを見つめていた彼女の視線が右へと動きました。目の前を二羽のツバメが横切ったのです。

「私、鳥に生まれたかったわ」

彼女はポツリとそんなことを呟きました。

「なぜですか」

私は思わず聞き返しました。

「だって、鳥は空を自由に飛べるのよ。そうすれば、この動かない足に悩まされることもないもの」

彼女は空に憧れていたのです。足を使わなくても翼さえあれば暮らしていける世界に。この絶望だけしかないこの世界に嫌気がさしていたのでしょう。だから鳥になりたい。人は自ら飛ぶことができないのですから。

「また話しかけてもいいですか？」

「ええ」

彼女はツバメを目で追いつつそう返事をしました。

私は次の週の日曜日に彼女に会いに公園へと向かいました。今日はあいにくの曇り空です。空には青空を隠すように、鼠色の雲が存在感をしめしていました。

今日は天気悪いしいないかなと思いつつも私は公園へ足を踏み入れました。いましました。

彼女は先週と同じベンチで同じように空を見上げていました。

「こんにちは」

「こんにちは」

私が声をかけると一度視線をこちらに移したあと、あいさつだけしすぐに空に視線を戻しました。

「今日は曇ってますね」

「ええ」

「曇り空は好きなんですか」

「嫌いよ」

短い言葉で返ってきます。

やはり空が嫌いらしい。

「嫌いなのに空を見てるんですか」

嫌いなのに、空をずっと見ている。矛盾している。嫌いなら見なければいいのに。

「空はわたしの憧れだから」

やはり憧れていました。ではなぜ嫌いなのでしょうか。

「わたしを拒む地面でなくて、わたしが存在しうる世界だから」

足がそうとうコンプレックスなのでしょう。それが私にもわかった。

「でも私をその世界も受け入れてくれないの」

足を使わなくてもいい世界。彼女にとって夢のような世界。だからその世界に行きたいが、人間に生まれてしまったからには地べたを這いずり回るしかない。

「隣いですか」

「どうぞ」

私は彼女の隣に慣れた動作で腰を下ろす。

しばらくのあいだ彼女にあわせてぼうっとしていました。忙しい喧騒の中から隔離された静かな世界に心が洗われるような気分です。

「わたし手術するかもしれない」

彼女は前振りもなく言葉を零す。もしかしたら彼女も何も考えてないのかもしれない。

それぐらいに謎で、突然でした。

「わたしの足を治せる先生が見つかったの」

「よかったじゃないですか」

「ありがとう」

一瞬だけ彼女の顔がゆるんだのに気づきました。しかし、すぐに険しいものに戻ったのです。

「でもわたし受けようか悩んでて」

「なぜです」

「親に負担がかかるからよ」

動かない足を動くようにする。それは簡単なことではないはず。だから、高額になるのは当然です。私の想像する額の遥か上を言っていることでしょうか。

だから、歩くことを諦めるのでしょうか。

諦めたらいけない。

「前にあなたがしてくれた鳥の話覚えてますか」

「もちろんよ」

「鳥もずっと空を飛んでいるわけじゃありません。木で休むとき、歩くときは足を使っています。足を使っていないわけではないんです」

なんでこんなに言葉がスラスラと口からでてくるのかはわからない。けど彼女に諦めさせたくなかった。

「だから、私は挑戦すべきじゃないかと思うんです。親もあなたが歩けるようになることが幸せだと思う」

言っちゃった。

彼女は戸惑いの表情をしている。彼女はただ同意が欲しかったのだ。誰でもいい。その誰かに車椅子でいいと言って欲しかったのだ。

私はというと二回目しか話したことのない相手に説教をしてしまったことに耐えられなくなっていました。

「では」

私は立ち上がりその場を去る。赤く染まった顔を隠しながら。

まだ自分の足で歩けるといふチャンスを棒に振って欲しくない。

私たちには翼なんてない。鳥のように空を飛ぶという幻想を追うことは無駄だ。だから、この足で歩くしかない――